別府大学 図書館 NOV.2 1. 1984

佐伯史談

第一二一号

「郷土史研究」誌 通巻一四三号

昭和五十四年十二月十五日発行

佐伯史談会

事務所 佐伯市大字稲垣字龍頭手稲柴方

巻頭提言

佐伯史談会の使命

―新年度に寄する期待―

佐伯史談会
到会長　羽　柴　弘

佐伯史談会は約五百の会員・会友をもち、堅実な心がけながら活発な研修活動をつづけ、次々と地域社会に奉仕寄与することも励んで来たつもりである。

機関誌「佐伯史談」も、見すぼらしい姿ながら息長くつづけ、これはこれなりに大いにお役に立ち、この累積はまことに貴重である。単に記録・資料集として考えても、郷土資料の大森林である。霧水とも云える山が建築用材、あるいはパルプ用材、分け入れば幾らでも貴重な資材にことを欠かないだろう。

この築き上げて来た二十数年の累積は、なんと膨大なものになってお互いの中に蔵されているものが累積黒字は、新年度さらに伸びしてゆかなければならない。昔は「書号だから、執筆寄稿者は延べ千人をはるかに越す。お互いに大事に保存しようではないか。

さて次の課題である。去る十一月主催した独歩資料展で、結論のように話の出た文学碑の建設である。

国木田独歩の文学は今も城山の樹林の中に、山頂城跡に息づいている。城山に登る人々多くがこの佐伯の自然を、城山の林の中に見た独歩の文学的を観照し、学びとろうとする人が意外に少ないのではないか。わが史談会が主唱して、市内の各種文化団体にも協力をいやおうなく、一般市民の浄財をあつめて「春の鳥」の一節を刻んだ文学碑を建てようというのである。

中根先生の歌碑がある。独歩の「城山」も出来た。矢野龍渓の詩を刻んだ頌彰碑も建って、三の丸付近は表裏まであである。ところが山頂がさみしい。

今の「独歩碑」は独歩の文学は偲べない。幸い城山々頂は、独歩

本号の主な内容

巻頭　佐伯史談会の使命（羽柴弘）…一
研究　毛利高政と石川・木村氏の国絵（中村民）…三
〃　佐伯と国木田独歩（山内武麟）…七
紹介　珍らしい大衆行事寸見（高橋四）…一二
〃　字目町の指定文化財……一四
〃　墓　異説佐伯惟治記……一五
〃　異本佐伯惟治秀歌宮内家……一六
〃　遺跡　地名調査こぼれ話（中村敏仁）…一七
〃　回顧二十八年（羽柴弘）……二一
〃　初めまして（並河洋）……三
〃　祭り　歴史の復原を（片岡博）……二四
〃　墨一尺の星丸（上行清光）……二五
〃　宇目西山を歩いて（羽柴）……二六
〃　孫　常盤井路記念碑（山本保）……二七

の小説「春の鳥」の舞台である。われわれ佐伯人の心のふるさとを、独歩はその自然観と人生観をもって、愛情をかたむけて書いている。この独歩の文学を、城山を愛する人々に、親しんでもらおうではないか。

今一つ、これは城山山麓山手通りの家並みの中に、東京の片岡博氏から指摘されている、「唖泉」の還原である。

「唖泉」は、お倉の井戸「安井」、西谷小路の奥にある「甘泉」と共に、名医今泉元節が私財を投じて掘り、城下町の人々に提供したもので、「今泉元苗の三義井」と称えられたものである。

ところが、好学の藩主高橋侯がこれに「唖泉」と命名し、藩学四教堂松下筑陰が銘文（漢詩）を、その井桁に書かれている。この点三人を一つにまとめた歴史的なものので、文化財として高く評価されるべきものである。

ところが片岡氏の言うが如くに、井戸そのものは片岡氏邸内である（注）が、「唖泉」の井桁はお隣りの、元秋山邸（後片岡本家）の庭先の、小井戸の上にのっかっている。先年乗佐伯印刷の平岩氏が住まわれていたが、つい最近手放されているとのことである。

「唖泉」の上に「唖泉の井桁」を復元する、その還原に努力する絶好のチャンスではないかと考えられる。これはあえて片岡氏の指摘にもとずくものでなく、早くから考えられていたもの、詳細は「佐伯市史」の七二三ページを参照願いたい。

「唖泉の井桁」は「唖泉」の位置片岡家の邸内に還したい。これも差当りわが史談会の新年度の事業としてすることが最も適切であろう。若干の費も要ろうが、交渉次第では実現は無理ではないだろう。

東京の片岡氏も黙って見ていないだろう。

なお、一月以降の新年度、史談会はどう動くべきか、氣になることがいくらもある、要点をかかげ箇条書きにいくつかきのべて、役員諸氏にお考えいただきたい。

佐伯史談会 新年度の動き

1. 史談会の組織機構の改変
   研修部＝研修活動の立案・交渉・推進一切
   事業部＝地域社会への奉仕事業万端
   経理部＝会の活動すべてにわたる会計経理担当
   編集部＝機関誌「佐伯史談」の編集のすべて
   庶務部＝事務一切（事務局長外部員数名）
2. 史談会の規約改定
   目的 事業、会員構成、役員、会議、会費 等
   起草委員の委嘱
3. 機関誌「佐伯史談」の改革
   活字印刷、題字書き変える 印刷所の研討交渉
   地区別領布組織の再編、整備
   編集部組織と分担

少く少くは、史談会が出版部でもつくって、会員の研修になる著作を肩代りして、編集・出版の仕事を担当して、本をつくることである。指を折って見ると何人かすでに出版し、そのような計画をもっている会員が数人ある。そんな場合に出来上った本の領布販売にも協力して、多年の研修の成果を盛り上げたい。

以上は、私が今思いつくままに述べたまでで、今後の会の運営に参考にして頂ければ幸いである。お互いに積極的に、希望・抱負を高くかかげて、新年度をさらに生々発展としようではないか。

〈終〉

（おことわり、このページ右上の部分うっかり火熱にふれましたので……）